

図書館員から見た百年史編集室

薄 久 代

九八

『東京大学百年史通史 三』について『資料 三』の刊行が間近かにせまり、さらに、作業中の『部局史』 四冊の出版によって、百年史全10冊が完結する計画ときいている。百年にわたる東京大学の歴史編集には莫大な量の資料による調査研究が長年おこなわれてきたが、その編集者はじめ、多くの関係者の熱意と努力による成果が、広く期待されている。外部から、このように眺めていたが、最近、編集室の資料整理等の仕事で出入りすることになり、身近かにその現場に接し、一層の敬意の念をもって仕事を知った次第である。

ところで、気の早い話のようで恐縮だが、この『百年史』完了後、その編集のために収集された種々の貴重な資料は、どうなるのであろうか、という疑問がわいた。編集室は、役割を終えて閉じられるのであろう。この時、多くの人の尽力によって集められた貴重な資料群は、誰しも、反古同然の始末はしたくない財産である。とりあえずの保管として、散逸を防ぐのであれば、ダンボール箱に詰め、明細を書き積み上げて置く、その保管場所を考えるということであろうか。しかし、これでは必要な時、資料が取り出しにくい。そこでほとんど使われることもなく、やがてほこりをかぶる。大切な資料だといひ伝えられ、何年たっても捨てられない困った荷物ということになる。このような例は珍らしくはない。百年史の資料は、次の歴史編集事業がお

こなわれるまで蔵っておいてよいものであろうか。このコレクションは、一点一点他では得がたい資料が少なくない。編集業務が終了してもひきつづきさまざまな研究その他の必要に応じて利用されるものがある。

利用しにくくなる第二の原因は、いうまでもなく、常に、必要な整理と保存に人手がかけられていないことである。さらに、絶えず資料を収集する機能をもたないことにも問題がある。現在もまた次の時代の歴史を築くものであるから、過去の蓄積を保存し、補い、そして新しい時代の資料を収集しつづけることによって活力のある資料室を出現させることが可能になるであろう。一時的にでも片付けて機能停止してしまうことは、収集も、利用も途切れて回復には大変な作業ともなうことにもなる。その維持のためには、現在の、編集室とはまた異なる機能をもつ資料室としての具体的な計画を今から検討しても決して早すぎはしないのである。

『百年史』の刊行が進み、多くの人の目にふれるにしたがって、各種の質問や調査依頼・利用申し込みの件数は増大するものと予測される。この点は、これまでの百年史資料が整理されていけば、専門的知識と経験をもつ現職員が、研究業務の合間に利用者に対応しながら新人の養成をおこなえば、ひきつづきすぐれたサービスが出来る。一方、

収集についてはこれまでの蓄積も含めて今後の資料室の収集方針を明確に示し、更に全学的に協力を得られる立場をもち、個人の善意や努力、偶然の入手によってアンバランスに蓄積した資料の不足を補い充実させなければならないといえる。東大のように大きな組織でしかも学部ごとの自治の強いところでは、文書取扱の共通理解を基盤とした全学的な記録管理方針規程の作成が必要である。そして各部局事務室や図書室等の協力を求めなければならない。他方、収集・整理業務については、手をかければ限らない。限られた職員数で効果的に、手落ちなく一定時間内に処理するためには、資料の選択・整理の力量を高めなければならない。現場の職員が、その資料室の目的・資料の特質を理解し、実務の中で常に自己研修をおこなうことが必要であり、そしてそれがまた仕事に対する喜びを産むことにもなる。即ち、安定した身分を与えられた職員がこのような仕事の中で育っていくことが、充実したコレクションを作り、よりよいサービスをおこなう結果を生むことになるのであろう。このようなことを考えると編集室の業務完了後の研究機能や図書館の機能は、新しい発想を加えて具体的に運営方針を検討せざるを得ない時期にすでにきていると思うのである。

かつて訪れたイェール大学の立派な貴重書の建物は、照明のない窓もない大理石の壁。この壁を通すほのかな外の光が、やわらかく室内に流れ、陳列されたゲーテの手記が、落着いたそしてほのぼのとしたその光に包まれ浮き上って見えた。一步室内にはいって立ちすくむ思いであった。途方もない金額の寄贈によって建てられたのだそうである。これほどの設備は無理であっても、東大は、東大としての特色の

ある雰囲気作り、整った環境によって資料室はたしかに一層効果をあげると思う。しかし、ホテルの味も、生協の食堂も、また家庭料理も、それぞれ提供する台所の体制が貧弱であってはよい結果は生まれない。材料の仕入・経費・腕前等の組織的な日々の安定した働きがあつて、客に満足を与える運営が成立する。

筆者の心に残る二つの言葉で終りたい。もう数年前のことで正確さを欠くが、経済学部の石井寛治教授から、ケンブリッジ大学図書館の資料利用について経験談を聞いた時のことである。阿片戦争当時の古い文書や商人の証文を収集している資料室へかよつた時、貸し出す職員の方からにこやかにサンキューといつて丁寧に整理された資料を差出した。その態度は、私達の整理した資料を使つてくれてありがとう、というふうに感じられたという。専門家の間では次第にこのコレクションは知られ、夏休みなどには世界各国から研究者が集つてくるというのである。こうして、学問の拡がる手助けを、資料整理という仕事を通しておこなっている喜びを、きっとこの図書館員は感じていたのであろうと想像し、感動したのである。もう一つは、これも少し前のことであるが、筆者の勤務していた図書館に数年間在職していた事務関係の主任の人が「私達は事務職員で、図書館については素人だが、やはり図書館の職員としてその充実のために、司書の裏方の業務を運営の潤滑油としての立場で、精いっぱいやるつもりだ、それが仕事だと皆思っている」という。司書に対し、その責任の重さについての自覚をうながされたという思いがした。いわゆる大学の教育研究のための「大学構成員の協力」ということがしばしばいわれたが、研究

者・図書職員・事務職員の理解と協力によって、よき資料館が出現するものと思う時、夢はふくらむのである。

東大の歴史を示し、さまざまな角度から多くの研究者に活用される利用しやすい魅力的な資料室の基礎づくりが出来る日を望み、そして、箱詰め、棚詰めになった資料がほこりをかぶって保管されるような事態にならぬようせつに願っている。

(昭和60年10月 記)

(すすき ひさよ 元東京大学総合図書館員)